

月刊

中東レポート

第 99 号

発行 ウニク書舗
 東京都千代田区神田神保町1-52
 TEL (03) 3291-5533
 編集 J. R. A.
 郵便振替 東京1-48443
 三菱銀行神保町支店 当座 9012656
 会員制 年会費 24,000円

シオニストの暴虐に対して、連帯＝統一を

一九九四年三月一〇日

前号で、ラビンをはじめとした軍部の策動とそれへのアラファト議長の妥協を見てきたが、その後の一カ月間にそれがいっそう明確になった。

ヘブロンの大虐殺は、イスラエル軍部の支援なくしてはできるものではなかった。軍部によるニセ「調査委員会」の発表は、そうした自らの策動の破綻を示すものになっている。

ラビンとアラファト議長に救いの手を差し伸べるかのように、クリントンが、突然、交渉のワシントンでの進行とそれへの米国の積極的な役割を提案した。アラファト議長はそれに飛び

つく発言をしたが、PLO執行委で批判され、条件を提示することになった。

299 カイロ合意の後、アラファト議長はいっそう、内部からの批判を受けることになっていくが、他のアラブ諸国が交渉を中断する方向へと向かっているのに、クリントンの提案に飛びつきあり方は、いっそう人民の批判を作り出した。被占領地内外の人民大衆は、ラビンとアラファト議長への怒りを強くし、各地で、ラビンとアラファトの模擬人形が燃やされるといふ事態になっている。

良心的なアラブの紙誌は、アラファトは今

目次
 シオニストの暴虐に対して、連帯＝統一を……1
 資料……7

- ・特別緊急声明
 - ・報復のよびかけ
 - ・PFLP声明(抄)
 - ・イブラヒミ・モスクとシオニストの侵略策動(抄)
 - ・和平交渉における対応の再検討を—K・ハンサン(抄)
 - ・ほとんどのイスラエル人は和平を望んでいる
 - シャース(抄)
 - ・UNRWAとパレスチナ再難民
- 重要日誌(一九九四年二月一日)三月一〇日……14

こそ、アラブの連帯、協調の再結成のために力を注げ、と忠告した。

にもかかわらず、アラファト議長はカイロでラビンの特使と会談した。これは、人民の非難や忠告に聞く耳を持たず、アラブの連帯＝包括和平よりも、個別利害を最優先すると宣言したに等しい。

一年あまり前の「追放」と同様に、ラビン政権の反動性が明確になり、人民の怒りが爆発している。ヘブロン大虐殺とその後動向は、「追放」がイスラエル神話を崩壊させ、ラビン政権を死滅への道へと導き、今回それを加速することになったように、「アラファトの権威」を死滅への道へと導くことになっている。

ヘブロン虐殺とそれが生み出した「混沌?」、さまざまな矛盾、そこに秘められた統一の基礎に、今号は、焦点をあててみたい。

一 ヘブロンの大虐殺——またも和平過程の頓挫
 モスレムにとって聖なる月の一つである、ラ

マダン(断食月)の金曜の朝に起こった、ヘブ
ロンのイブラヒミ・モスクでの大虐殺は、パレ
スチナ人民はもちろんのこと、アラブ・イスラ
ム諸国の人民の激しい怒りを作り出した。

被占領地内のパレスチナ人民はもちろんのこと、
四八年ライン内のパレスチナ人民も各地で
決起した。ハインティファードが四八年ライ
ンにまで拡大した。西側の報道機関も伝えた。
イスラエル放送も、連日、外出禁止令にもか
かわらず、インティファードが展開されてい
る。伝えざるをえない状況にある。離散の
パレスチナ人民もまた各地で、シオニストへの
怒りとパレスチナのアイデンティティを掲げて、
連帯を示したし、各地のアラブ・イスラム勢力
も闘いを展開した。

ユダヤ人の中からも、ハ入植者の捕虜たりつ
づけることを拒否する。という声が大きく上
がり、ピース・ナウが組織した三月五日のエルサ
レムでのデモは、「これまでの最大の動員」(主
権者)を記録した。

エルサレムのAP通信員も、ハ大虐殺は人民
の反乱を煽っただけではなく、妥協を推進して
きた関係者の信頼性に大きなキズ、不信を作り
出した。と伝えている。

クリントンには、慌てて、PLOに向けて、ハ交
渉の継続を! 両者で無理ならワシントンに移
して、米国が積極的な役割を果たす形で推進し
よう。そこそが、暴力行為の拡大を防止し、
終結させるといふ、和平過程の目的に沿ったも
のである。と宣言した。ラビンも、ハ「気の狂っ

た一人の犯罪」であり、交渉を継続すること
で解決を計ろう、それが双方の過激主義者との
対決の道である。と、PLOに向けて発した
(三月二日)。

アラブ側が(当事国、アラブ連盟、イスラム
諸国機構なども)、包括和平、国連決議を基礎
にした、国連の役割を中心にしたものへの、交
渉の再編を前面に押し立てているのに対して、
シオニスト側は、PLOの抱き込みを中心に掲
げている。

要は、PLOさえ抱き込めば、他のアラブ諸
国との問題もそれに倣う、とみているのである
し、クリントン政権にいたっては、これまでは、
ハ両者で解決すべきことで、介入しても真の問
題解決にならない。としてきたことを忘れたか
のような、恥知らずぶりを露骨に示した。が、
言うまでもなく、こうしたあり方は、人民の怒
りをいっそう大きくするだけであった。

民族統一指導部は、二五日の緊急声明で、
「交渉の継続は、われらが殉教者を踏みつけに
するものであり、占領者とその政策への協力で
ある」と交渉の停止を、そして、国連決議に基
づくものへの再編を求めた(資料参照)。

アシュラウイ女史は、「これ(この大虐殺)
は、交渉の幅を狭くし、交渉の、交渉に関わる
人士の、とりわけイスラエル側に対する、信頼
性を突き崩した。仮にPLOが交渉を継続する
ことを決定したとしても、(大衆のPLOに対
する)雰囲気は非常に悪いものになるだろうし、
世論の支持を取り付けることは非常に困難なも
たのである。

時期を同じくして、米CIAの高官のダブル
スパイ事件が大々的に報道されたが、ハマスは
単に「モグラ」として組織しただけではなく、
「特務」への攻撃に積極的に協力することに成
功した。さらに、ハマスは、「裏切り者」に向
けて、ハシンベトなどの接触者を殺すか、そう
した攻撃への支援をすれば、これまでの罪を許
し、保護をする。とよびかけている(一七日の
声明文)。

こうしたことは、もちろん、初めてのことで
はない。昨年一月に、「裏切り者」のアパート
を訪問した「特務」が暗殺されるという事件が
あった。特記すべきは、昨年の事件は、ラビン
の追放政策がこれを作り出し、今回の事件は、
九月一三日合意からカイロ合意へと至る過程で、
下地が作られていったということである。

オスロから、カイロへと、議長を抱き込み、
妥協を押しつけることに成功したかのように見
えるが、実は、足元から掘り崩されていた。そ
うした背景があったからこそ、ラビン政権は、
ことさらに、妊婦殺しを騒ぎ立てたのである。

妊婦殺しに対する非難での、国際的なウケは
PLO議長派にあったが、人民のレベルでは
入植者の存在そのもの、その武装などを問題に
することもなしに、唯々諸々とラビンの要求を
受け入れて、国際的なウケ「正義性」を示さ
んとする議長派への非難の声が上がった。ラビ
ン政権は、一五日の交渉でも、「裏切り者」の
権利回復でPLO側にプッシュしていたから、

のにならう」と語った(二五日)。

だが、アラファト議長は、クリントンやラビ
ンのよびかけに対し、即座にハ乗り気Vを示し
た。被占領地内外の人民の声を察知した他の指
導部が、そうした動きを阻止することになった
が、人民のアラファト議長への幻想はついえた、
と言っても過言ではなからう。各地のデモで、
ラビンの人形、イスラエル旗、米国旗と並んで、
アラファトの人形が燃やされたことに、それが
証明されている。

今回のヘブロン大虐殺は、人民の、そして国
際的な非難を作り出したという面でも、一年あま
り前の四一五人の大量追放と類似した点が多々
ある。もちろん、違いもある。後者の筆頭はア
ラファト議長の動向である。だが、それは二つ
にして、一つのことなのである。

われわれは、追放を評して、ハラビンの、イ
スラエルの、死滅への道Vとみなした。シオニ
ストは一定の妥協をもって、議長派を取り込む
ことに成功し、「死滅への道」を回避した、と
みなしているのであろう。その慢った姿かっ
つての皇国の軍部と同様のそれ。が、今回の大虐
殺へと至ったのである。

だが、被追放者たちの言葉で紹介した(97号
資料参照)ように、ハマスは地方的な一組織か
ら、国際的な支援網を有する組織に変わったし、
運動展開の仕方などの多くの教訓を得た(もち
ろんそれにはまだまだ不十分はある。が、国際
報道機関も、元被追放者たちが、「マルジ・アッ
ズホール」の教訓を口にして、運動展開してい

余計である。
二月八日のカイロ合意後、再びアラファト議
長の側近部分から批判の声が拡大することにな
ったし、それは翻せば、被占領地でのハマスの中
心とした「反対派」の伸張になって現われてい
た。そうした現実が、自らの妥協路線「民族の
大義の逸脱が作り出していることを問い返すの
ではなく、ハマスとの対抗だけを考えた屈辱的
なものへと結びついた、とも言えよう。

そうしたパレスチナの現状が、軍部ハ入植者
をして、「妊婦殺しへの報復」という名のいっ
そう慢ったあり方を作り出すことになっていっ
た。

これに関連して、パレスチナ側のもう一つの
負の側面にも触れなければならない。ちょうど
その頃、一〇組織内では大きな矛盾が起きてい
た。ハマスが民主戦線(DF)のガザ地区の武
装部隊の責任者を「敵の手先」として処刑した
ばかりか、その「自供」のテープを国際的な通
信社に送付した(二四日)。

あまり触れたくない話ではあるが、ハパレス
チナ組織の内部には、「敵の手先」が多数存在
する。と言われている(昨秋、PLO本部でス
パイ事件が起こったのは、その一端にすぎない)。
だが、一般的に言われていることと特定される
こととは違ふし、それが地下組織でなければな
らない武装部隊のトップが「敵の手先」であっ
たということが判明しただけでも大変なことな
のに、それを国際的な通信社に暴露されたのだ
から、DFも黙認するわけにはいかない。

今回のヘブロン大虐殺の契機は、ハマスが入
植者を攻撃したこと、その入植者が妊婦であっ
たことが、理由の一つとされている。

ラビン政権は、その入植者が武装していたか
どうかに触れることなく、女性であったこと、
妊婦であったことを騒ぎ立て、PLOにそうした
た攻撃を非難するよう要求した(被占領地の入
植者は、公称一二万人、そして、その武器許可
は、公称六万。武器の数は、それよりもずっと
多いとユダヤ人も認めている。つまり、子供を
除いた全員が武装している状況にある)。が、
PLOもまた、武装の件を確かめせず、それ
を非難した(二四日)。

だが、ラビン政権にとっては、実は、もっと
恐いことがあった。それは、二月二三日に起こ
った、ラマラでの「特務」への攻撃事件である。
パレスチナ人ナンバーの車で通行中、待ち伏せ
され、「特務」一人が死し、二人が負傷した。

ハマスは昨年末に、「裏切り者」に対する一
カ月間の攻撃停止を宣言し、その間に、「裏切
り者」に人民の側につくことをよびかけた。そ
して、一月二二日、そうした攻撃停止の期限が
切れたことを宣言した。その一カ月間の成果が、
この「特務」への待ち伏せ攻撃となって示され

そうしたことから、一〇組織の会議でも、D Fとハマスが非難合戦になり、ヘブロンの大虐殺に対する共同声明すら出せない状況になっている。

話が前後するが、軍部は、そうした一〇組織内の対立をもって、まさに、好機至れりと、ヘブロン虐殺を展開した、とみることもできる。

だが、言うまでもなく、それは、「追放」がそうであったように、見込み違い、奢れる者の術策におぼれた行為でしかなかった。

三 レバノン問題との関わり

イスラエル軍部の策動は、レバノンとの関係に端的に示されている。

前号で記したように、ハズバラの大攻撃によって、レバノン南部はいっそう緊張した。イスラエル軍は、例によって、戦車部隊、砲兵部隊などの増強で、大攻撃の脅しをかけると同時に、クリントン政権を動員して、シリアにハズバラなどの武装解除をするよう圧力をかけた。しかし、そうした脅しに対して、シリア、レバノンは、△レジスタンスは、国際的にも認知された、占領に対する人民の正当な権利である。安保理決議四二五の遵守こそが解決の基礎△という対応を崩さなかった。

そうしたなかで、「黒い九月一三日旅団」を名乗る組織が、ガリリーにロケット攻撃をしかけた(一六日)。△黒い九月一三日旅団が、ハズバラなどではなく、ファタハの反アラファト勢力である▽ことをイスラエル軍部はいち早く

く公表し(マクダの組織もそうした声明を発表)、ハズバラなどへの総攻撃をかけるかどうかを検討中としつつ、策謀を展開した。△「南部の平和な状況を維持する」ために努力しているが、こうした米国の努力にも限界がある▽という在レバノン米大使発言(一八日、南部の現状を「平和」とはとんでもない、という怒りをレバノン人民から招いた)と、△ガザからの撤退を二週間で終了する▽というニセ宣伝が、それである。

こうした発表は、シリアレバノンを慌てさせた。ガリリーへのロケット攻撃は七月の「相互理解」を破る行為であり、(それに対するために)ガザから部隊を撤収するということは、翻せば、その部隊を南部に回す、すなわち、大攻勢をかける、米国はそれを容認するという意味だからである。

ハラウィ大統領とアサド大統領との会談(二〇日)。それに続く、レバノンの安全保障会議を経て、政府は、「占領に対するレジスタンスの枠を越える部分(複数) に対して対処することなどを含めた治安決定が発表された(二三日)。

これには、ハズバラはもとより、レジスタンスを積極的に支持する勢力、人士などが反発した。「部分(複数)」というあいまいな表現が使われ、レジスタンス一般への武装解除へも拡大し得る余地を残した発表だったからである。親政府系と言われる新聞も、△こうしたあり方は米国には受け入れられるかも知れないが、レ

もちろん、レバノンのイスラム諸勢力もその点ではバチカンを批判している。が、法王の訪問は、それとは切り離し、宗教的なものとして、逆にレバノンの再建と絡ませて、とらえるという仕方をとっている。実は、それに反対しているのが、フランスに亡命しているアウン(元将軍)などの部分であり、イスラエルのカイライ民兵(南部レバノン軍(SLA)などである。

これまでバチカンのイスラエルとの関係を批判することに中心をおいていた、ジョンブラッド氏は、二月一三日、△宗教的なもの▽と強調するバチカンの主張を尊重し、その訪問は「レバノンのすべてによって歓迎される」と発表した。同じ時期に、アウンの訪問は、△シリアの支配を承認することになる▽と反対を表明した。

また、ベリー国会議長は、△政治亡命者はレバノンの再建のため▽にも帰還するようよびかけた(二六日)。こうしたよびかけがなされる裏には、国内では、右派の強硬な反対派であった、レバノン軍団の首領、ジャジャが政府との接近を示していること、すなわち、国内ではほぼ民族和解が成立したことがある。

こうした動きを苦々しく思っているのは、イスラエル、その手先のSLA、一部の海外居住者である。そうしたレバノン人の中心はキリスト教徒ではあるが、SLAの内部でイスラム勢力が台頭している、というよりは、イスラム勢力がキリスト教徒を圧倒しつつある(96号資料参照)ように、イスラエルの手先キリスト教徒、としてくることはできない。

レバノン人民には受け入れられない▽と論評した。当然ながら(？)、イスラエル軍は、ガザ撤退云々のニセ宣伝を撤回した(二三日)。が、レジスタンスと政府の緊張は続いた。が、ヘブロンの大虐殺と、その二日後に起きたズークの教会での爆弾事件(一〇人死亡、五〇名負傷)は、全体的な反イスラエル(とその手先)の声の中で、(少なくとも現在の)レジスタンスの正当性を主張する側に軍配が上がった形になっている。

ズークの教会爆弾は、国際的な関心がヘブロンの大虐殺に集中することをかわそうとするものであり、(イスラエルの諜報機関である)モサドあるいはその手先の仕業であることが明確だからである。

二月のカタエブ本部爆破の際に、国際報道機関は「右派のカタエブ本部で爆弾事件」と発表したが、そこにシオニストの意図が如実に示された。一般的には、△右派への攻撃をしかけたのは左派▽と受けとめる。今回の爆弾事件に対しても、いくつもの国際的な報道機関は、△右派キリスト教徒の中心地▽での爆弾をことさらに強調した。あたかも、レバノンでは今も右派と左派の内戦が継続しているかのよう。

レバノンでは、五月に、ローマ法王が訪問する予定になっている。そのバチカンとイスラエルは一二月に国交を交わした。それには、イスラム世界から強い反発がある。エルサレム問題を未解決のままにした国交であり、イスラエルの占領を承認することにつながるからである。

ズークの教会爆弾の直後の記者会見で、プエズ外相は、「明らかに金曜のヘブロン大虐殺と関連している」と非難し、ハラウィ大統領は、△イスラエルか、その手先の仕業。だが、犯罪で犯罪を隠すことはできない▽と非難した。これはレバノンではほぼ一致した見解である。

が、指弾はできても、なかなか逮捕や根絶には至らない。捜査の手がのびると、奴らの「聖域」である、南部の被占領地「安全地帯」に逃げ込むからである。加えて、シオニストの宣伝を受け入れて、レジスタンスの武装と絡ませ、問題をあいまいにしようとする仕方をとる部分も存在する。そうすることで、レジスタンスと政府との矛盾を煽り、党派利害を占めるを目的に。

四 他の諸国の矛盾

a. イスラエル内部の矛盾

労働党書記長が二月二日に、「ゴランのシリアの主権」と「パレスチナの自決、国家樹立」は不可避という立場を打ち出した。相前後して、外相のペレスは、「二八家族の入植地のために、タイ労働者、警備の中隊、さらにはそこへの道路のパトロール、といった入植地は本当に必要なのだろうか?」と語った。

労働党の左派部分と連立左派のメレツはこうした見解を支持している。が、極右諸政党はゴランの返還やパレスチナ国家、入植地の撤収に反対であり、ラビンをはじめとする労働党の右派や軍部もこれに反対である。

ラビンは、そうした党内や閣内の動きを牽制するためにも、△国会内で安定した多数を形成するため▽と称して、元参謀長のエイタンが率いる右派のソメットや内相デリの汚職問題でいったん閣外にでた宗教党のシャスの入閣工作に懸命である。当然ながら(？)、ラビンはソメットやシャスの要求を受け入れようとする。

同時に、そうした工作のためにも、ラビン軍部は、強硬姿勢を示すことが必要であり、それがヘブロンの大虐殺へと至った、とも言える。が、ヘブロン大虐殺は、ラビンの側近と見られていた、住宅相ベン・エルゼルをも、ヘブロンを中心部などの入植地の撤去を提言するまでに至った。閣内では六人が公然とそうした主張を展開し、それへの支持は「ほとんどの閣僚」(環境相、サリド、三月六日)となっているのだが、住宅相は、元西岸の司令官であったことと、ラビンの側近と見られていたから、その深刻さがわかった。

側近ということでは、後継者とまで言われていた保健相のラモンが一月に辞任を表明した。原因は、彼の提唱した法案が労働党内でも却下されたこと、とされているが、その裏には政治的な違いもあった、とも言われている。が、それはさておき、ラビンも、側近の離脱と閣内の孤立という問題を抱えている。

そして、それをなんとかしようとしてもがけばもがくほど、「死滅への道」という深みにはまりこんでいく構造になっている。

b. フェイン国王

サウジがファハド国王の肝入りで、アル・ア
クサ・モスクなどの修復のための醸金を開始し
た(二月二二日)。前号でも伝えたように、こ
れはハシミテ王家の権威に関わることはある
が、ハシミテ王家はハッサン皇太子が、これ
を歓迎すると発表した(二三三)。

他方、フェイン国王は、イエメンの和解を調
停した(二〇日)。このイエメンの内紛にはか
なりサウジの手が絡んでいるとも言われている。
それを、形式的であれ、フェイン国王が調停し、
合意し調印へともっていった。アラブ諸国は一
様にフェイン国王の努力を称えたが、当然なが
らサウジの本音は違っていた。

それが如実に示されたのが、フェイン国王の
メッカ訪問である(三月八日)。ヨルダン、
この訪問を公式のものではなく、純粹に宗教
的なものとして行ったことを強調しているが、
私的宗教的なものであっても国家元首に対して
はファハド国王が会談することが慣例になって
いる。が、周知のように、ファハド国王はフェ
イン国王と会見することをしなかった。

さて、ヨルダンとサウジの矛盾という形になっ
たが、前号でも指摘したように、これはハシミ
テ王家とアラファト議長との矛盾につながる。
矛盾とまでは言えないが、ヘブロン大虐殺に
対して抗議の意を込めて、国民が三日間の喪に
服することを発表したフェイン国王と、米国の調
停に乗り気を示し、三月七日にはラビンの特使
と秘密会談を行ったアラファト議長との姿勢の

違いにも現われている。

原理主義者の台頭という問題では、両者は等
しい問題を抱えているとも言えるが、こうした
姿勢の違いは、原理主義者とのそれぞれの今後
の対処にも影響が出てくるであろう。

c. エジプト

原理主義者との矛盾という点で、もっと深刻
な問題を抱えているのはエジプトのムバラク政
権である。

エジプトの原理主義組織ジハードは、二月二
四日、外国企業、観光客などに撤退勧告の最後
通告を発した。二月九日のカイロ合意において
ムバラク政権は大きな役割を果たしたが、そこ
に示されるのは、なんとしてもアラファト議長
を抱き込んで、原理主義者の一部を自らの側に
引き止めておきたい、という意図である。

だが、ヘブロンの大虐殺はそうした意図の虚
しさを示し、カイロ大学などのデモはムバラ
ク政権そのものを掘り崩さんとする勢いを示し
た。

虐殺には、当然ながら、非難声明を出した。
が、ムサ外相は、PLO執行委の姿勢を批判し、
「このまま(交渉再開に踏み切れないという状
況)では、これまでの交渉の成果がだめになる」
とPLOに警告を発した(三月五日)。だが、
それは、実は自らの現状に関する悲鳴に他なら
ない。

そうしたよびかけにこたえて、アラファト議長
は、カイロでラビンの特使と三月七日に会談し
たが、安保理での非難決議すらシオニストの妨

南部の「安全地帯」でもストが展開された。

クネセットのメンバー、ダラオシャを団長と
する四八年ライン内のパレスチナ人が、アサド
大統領への弔問のために、シリアを訪問したが、
七日、ダマスカスの空港で、ダラオシャは、
「われわれは(イスラエルではなく)イスラエ
ル内のパレスチナ・アラブを代表してきた」こ
とを強調した。

三月九日には、パレスチナ人士四〇〇人が、
△国連決議を基礎にした交渉にすべきで、ズル
ズルと交渉に入るな△という声明を発表した。こ
れには、国民会議議員一二五名や一〇組織の代
表などが名を連ねている。

ヘブロンの大虐殺は、イスラエル軍部と入植
者の関係を如実に示しただけでなく、そうした
犯罪をごまかさんとする、クリントン政権の交
渉よびかけや安保理での米国の姿勢を鮮明にし
た。それは、パレスチナ、アラブ、イスラム、
そして世界の人民の連帯を創り出すことになっ
ている。

ヘブロン虐殺を、一年あまり前の「追放」時
の国際的な連帯以上のものを創り出す契機にす
ること、国連決議に沿った包括的な和平を掲げ
て、再度のアラブの統一、人民の統一への契機
とすること、そうした力を基礎に、国際的な連
帯の中で、世界の統合支配を策している、新世
界秩序を許さないことが、今もっとも必要であ
ろう。

資料

特別緊急声明

民族統一指導部、特別声明

* インティファダの声よりも大きなものは
ない

* 交渉の継続は殉教者の血を汚すものであり、
占領とその政策への協力である

△われらが栄光の人民、大衆へ△

△虐殺、抑圧、弾圧にもかかわらず、われら
が郷土で抵抗し、闘っている大衆へ△

インティファダの人民よ、シオニストの憎
しみによる流血はわれらが怒りを爆発させた。
占領し入植は、一再ならず、その醜い、真の姿
を曝け出した。われらが聖なるイブラヒム・モ
スクの中での占領軍の監督とその参加という形
で。そこには、われらが領土と人民を統括しよ
うとする占領とそれへの投降といった代価を払
うことに抗する、われらが人民が存在した。入
植者は殺害し、破壊することによってわれらが人民を
離散させんとしている。われらが人民の大義は、
カイロ、タバ、パリでの交渉のテーブルでズタ
ズタにされ、われらが人民はヘブロン、ガザ、
その他の被占領下の郷土全体で現実に殺されて
いる。

ヘブロンで、占領軍と入植者によって展開さ

害で作れないなかでの、こうしたあり方にパレ
スチナ、アラブ、イスラムの非難の声を煽るこ
とになっただけである。

ムバラク政権としては、直接的な非難が議長
の方に向いたことで、一定の救いになったのか
もしれないが、根本的にはたいした違いはない
ことは、連日の武装攻撃と大衆的なデモが示し
ている。

五 結語にかえて

パレスチナ人民が、複数の犯人によると言明
しているにもかかわらず、ニセ「調査委員会」
は、ヘブロン大虐殺の犯人の一人、イブラヒム・
モスクでパレスチナ人民に殴り殺された、ゴー
ルドシュタインの単独犯行であり、奴が射った
のは一一八発であると発表している。

一一八発で三〇〇人も死傷者を出している
という矛盾は、逆に軍部の入植者保護を証明し、
ユダヤ人の中からも非難の声が大きくなってい
る。

また、ラビン政権は極右の非合法化、一部の
入植者の逮捕、武器携帯許可の取り消し、一つ
の入植地の出入り禁止などの措置を発表したが、
それがまさに発表だけで、実際はまったく中身
がないことは、さまざま報道機関が暴露して
いる(ニューズウィーク三月一四日号一日本語
版でも紹介していると思うなど)。

三月三日、レバノンでは大虐殺抗議のストが
展開されたが、これまでパレスチナ関連ではそ
うしたことはまずなかったキリスト教徒地区や

れた、金曜の朝の流血の惨事は、四〇人以上の
殉教者をだし、二五〇人以上の負傷者を記録し
ているが、それは占領軍と入植者の計画的な役
割の一つの形態でしかない。それは、われらが
人民による、われらが民族的な大義、その正当
な権利の遂行のための闘い、陰謀との対決に対
して、民族的な大義の抹消を目的としたもので
ある。入植者は重武装し、占領軍によってあら
ゆる意味で保護されている。

△われらが戦闘的な人民へ△

イブラヒム・モスクでの流血の惨事は、アイ
ン・カラ、アル・アクサなどとして、繰り返さ
れる一連の犯罪の延長にある。それは投降の指
導部が、オスロ、カイロ合意として知られる投
降路線を通過させんとして、「平和の雰囲気」
とよんでいる足下で起こった。代わって、シオ
ニストの和平の概念は、われらが人民を抑圧、
弾圧し、抹殺の企てに対決することから向きを
変えるために殺害を展開し、妥協以外の道、闘
いの方途、抵抗の方途、インティファダの方
途、占領軍と対決し、入植者を追い出すための
対決の方途はないことを示すことを目的にした
ものである。

△われらが闘う人民大衆へ△

民族統一指導部(UNL)は、この大虐殺の
全面的な責任はイスラエル政府にあること、そ
の目的はわれらが人民をしてその郷土から移住
させることにあることを指弾する。同時に、U
NLは、投降路線もまた現在進行していること
に責任を有しているとみなす。

つまり、われらが殉教者の流血の上に、タバ、カイロ、パリでの交渉を継続することは、占領とその政策への協力でしかない。われわれは、われらが人民に、闘いを、投降の指導部に交渉を停止し、そこから撤収し、オスロ、カイロ「合意」を反古にし、われらがパレスチナの大義に関連した国際的な決議の遵守を堅持するよう働きかけることを、よびかける。

UNLはまた、国連の諸機関と国際社会に、そのイスラエルへの支持や抹殺の「和平」策動への支持を再考するようよびかける。ヘブロン大虐殺は「和平」の直接的な表現の一つである。われわれは国連と国際社会に、占領下にあるわれらが人民への保護を提供するという、その責任を履行するようよびかける。われわれは、国際的な諸決議を履行し、イスラエルをしてわれらが被占領下の郷土から撤退するよう強制することを、よびかける。

UNLは、われらが人民に対して、闘いを継続することを約束する。われらが殉教者や負傷者の流された血は、決して無駄にしてはならない。UNLは、殉教者の血への誓いとしても、殉教の道を進む。

△UNLは、われらが人民大衆に、以下を実行するよう、よびかける▽
 三日間の全面的な追悼！
 一 来週を占領軍と入植者への反撃の週に！
 一 一週間は家々や店に黒旗を！
 一 入植地への道路を封鎖し、至るところで奴らと対決し、奴らの車を動けなくさせよ！

われわれは、こうした血塗られた占領やその欺瞞的な言辞に、交渉で応え、投降することなどでははしらない。われわれは、シオニストの占領・抑圧の機関に対決する、われらが闘いを拡大し、あらゆる形態を伴った闘いをもって、敵侵略者と入植者をしてわれらが被占領地から撤退へと追い込むことを、われらが唯一の選択肢とせねばならない。

△勇敢なる人民へ▽
 諸君は、その神聖な場所を防衛し、民族の価値を示すものが解体されることから守ってきた。諸君は、帰還、独立への願いをしつかりと抱いてきた。シオニストの虐殺に対抗している諸君が祝福されることを心から願う。堅忍不拔のガザ、英雄的な西岸の人民が祝福されることを願う。ネゲブ、ガリリー、三角地帯、ナザレ、ヤファ（いずれも四八年の郷土）などで決起し、ヘブロンを虐殺に反撃しているわれらが人民が祝福されることを願う。ヨルダン、シリア、レバノンの離散の地のキャンプで闘っている人民が祝福されることを願う。諸君のすべてが、われらが人民の虐殺を停止すること、民族的な権利としての帰還、自決、聖なる都市エルサレムを首都とする独立国家を勝ち取ることを、声を大にして叫んでいることが祝福されることを願う。

そうすることを、われらが人民の連帯が、そのアイデンティティが、目的が、権威が、われらが郷土に帰属することその民族的な絆が一つであることが確認されている。われらが

一 攻撃部隊は占領軍や入植者との戦闘を！
 一 われらが人民が血液を提供したことを称えるとともに、さらなる連帯と統一をよびかける。すべての医療関係者は負傷者のための義務の遂行を！
 一 殉教者の葬儀の遂行を！
 一 至るところで葬儀のデモを！
 * われらが人民の闘い、万歳！
 * イブラヒム・モスクの殉教者、われらが人民の殉教者、永遠なれ！
 * 占領者とその支持者に恥辱を！
 * われわれは勝利する！

民族統一指導部
 九四年二月二十五日、8 AM

報復のよびかけ

民族統一指導部のよびかけ、
 第一〇一号（*）

* インティファダの声よりも大きなものはない！
 * パレスチナ人民の声よりも大きなものはない！
 △われらが英雄的な人民へ！▽
 △郷里の中の、そして在外の、われらがパレスチナの大衆へ！▽
 △われらがアラブ・イスラム民族の大衆へ！▽
 △自由の世界を産み出さん！▽
 諸君の前に真実が示された。シオニズムの醜悪にして、犯罪的な顔が、その血塗られた性格

闘いの団結がわれらが人民によって明確に示されている。すなわち、妥協の政策で分断をもたらされていることに対決し、民族の不変、誠実に関する民族的な提案を支持し、戦闘的な統一を推進している、ということ。

インティファダ民族統一指導部（以下、UNL）は、われらが人民のたいなる潜在力と能力をもって闘いを拡大していくことを約束するとともに、以下を確認する。

△パレスチナのレベルで▽

- UNLは、アラファトと彼の交渉団に、圧倒的な大衆の怒りが治まるまでの一時的な中断ではなく、オスロ、カイロ合意をキャンセルし、いっさいの交渉を停止するよう要請する。UNLは、以下の条件が満たされるまでは交渉をボイコットするよう、よびかける。
1. 敵の政府が入植活動を停止し、土地の没収をやめることを明確に示すこと。
 2. 敵の政府が、その不当な入植地のすべてを撤去、撤収することを確実にすること。
 3. 被占領下にあるわれらが人民の直接的にして一時的な国際的な保護措置をとること。
 4. 国際的な憲章、決議を基礎に、国連の仲介の下で交渉を確立すること。
- アラファトと彼の交渉団がこうした立場に立つことは、彼と彼のチームが民族の枠組みに戻る道を掃き清めることにならう。
- △アラブのレベルで▽
- UNLは、アラブ・イスラエル交渉に参加し

がここに暴露された。ここに占領が、その意味を如実に示した。侵略軍と入植者の部隊による抑圧が、歴史上でも最も残酷なものの一つとして、実行されていることを示した。

こうしたこと、モスラムの神聖な月に、その最も神聖な場所の一つ、イブラヒム・モスクで、無実で非武装の人民が宗教的な行為を履行している最中に、数百人に対して攻撃し、虐殺するようなことは、これまでにもなかった。こうした攻撃、虐殺は、シオニストの一部で打ち合わせ、一部の占領軍兵士と臆病な入植者によって遂行された。

唾棄すべきシオニストの乱射は、ヘブロンをモスクの中で、その中庭で、病院で、そしてこの聖なる都市のあらゆるところで、さらにはわれらが被占領下の郷土の至る所で、われらが人民の胸に発射された。が、それはシオニストの最終目的の本質を確認し、暴露することになった。つまり、われらが人民を殺害し、われらが土地から放逐し、シオニスト入植者どもの付属物にせんとすることにこそ、その目的があることを。

この乱射は、和平におけるシオニストのニセの言辞を暴露した。われらが非武装の人民の被害へと導く和平や平和とは、いったいなんたる和平であることか?! そして、こうした大流血の虐殺―これはデル・ヤシン、クフル・カーセム、アイン・カラ、アル・アクサ、アブ・ディース、ガザなどの延長上にある―に道を開くような交渉とは、いったいなんぞや?!

ているすべてのアラブ諸国に、敵の政府が上記した条件に関わるまではその参加を停止するよう、要請する。アラブ連盟がわれらが人民の保護を確実にするいっさいの措置を要請したように、そうすることが、自らの土地における抵抗、敵の政府が実践している大計画たるあらゆる抑圧やユダヤ化との対決を可能にする。

UNLは、われらがアラブ民族の人民とアラブの解放運動に、われわれへの支援の声とシオニスト拡張主義の政策への声を大きくするよう、よびかける。これに関連しては、われわれは、われらがアラブの民族大衆が、多くのアラブ国内で、支援と連帯の決起を行ったことを、高く評価する。

△国際的なレベルで▽

UNLは、国連、とりわけ安保理に対して、その責任をもってわれらが非武装の人民を保護すること、真に国際的な保護措置を採用すること、そうすることを通して、国際的な機関としての信頼性を証明することを、よびかける。

UNLはまた、米国の立場、それが相変わらず安保理において、われらが人民の保護を保証する決議を阻害している障害物であり続けていることを、非難する。UNLは、米国の二股外交を非難し、安保理メンバーが、われらが人民がその郷土で、自由で、主権を有し、安全保障がなされるような権利に関して、彼らの責任を全うすることを、要請する。われわれはまた、人権を支持する欧州の人民と国際的な組織に、われらが非武装の人民に対するその任務を遂行

するよう、よびかける。

△シオニストのレベルで▽

UNLは、われらが殉教者の家族への損害賠償なる支払いをもって、そうした犯罪をウヤムヤにせんとする、敵のあらゆる策動を拒否する。われらが英雄の家族たちは、こうしたシオニストの安っぽい策動でだまされることはない。

UNLは、敵の政府が一部の戦術的な獄中者を釈放すること、われらが人民を買収しようとしていることを、拒否する。われわれは、われらがすべての獄中者はその郷里において自由の権利を有していることを、確認する。

△われらが英雄的な人民へ▽

△自由の戦士たち、インティファダの、投石、火炎ビン、英雄たちへ▽

今日は諸君の日々である。われらが殉教者の血に対して報復をよびかける。敵、ファシスト、シオニスト、占領軍と入植者の部隊をして、奴らの隠された犯罪に対するツケを支払わせん。われらがインティファダはパレスチナ全土、アラブ民族全体を通じた支持を、再度獲得していることが明確になっている。

勇敢なる腕、武器をふるえ！ 諸君の頭を高く保て！ 飢餓、封鎖、外出禁止令を打ち破る犠牲性を示せ！ 占領者は今や震えあがっており、その軍は諸君の武器、投石、火炎ビンに怖気づいている。外出禁止令を打ち破り、被占領下のわれらが領土から占領軍を追い出さん。闘いに對するわれらが決意をいっそう大きくせよ！ UNLは、大虐殺に直面したわれらが人民が

にします)

PFLLP声明(抄)

九四年二月二六日

昨日の朝、被占領下のヘブロン、イブラヒミ・モスクで、入植者どもによって展開された、背筋が冷たくなるほど醜悪な大虐殺を、人民戦線は、改めて、占領当局への憤りをこめて、非難する。

この大虐殺で、われらが礼拝中の同胞の数十人が殺され、数百人が負傷した。

これは占領と入植に対する、そしてガザ・アリエールハ合意に対するパレスチナ勢力の同盟(一〇組織の正式名称)が、内部の違いを克服する機会とする必要を示している。

それはまた、ファタハのタカヤ諸組織がアラファトの指導部に対して、その指示に対して、不服従を明確にし、いち早く報復を宣言した「赤いワシ」(PFの武装組織)、「赤い星」(DF)、「イゼツディン・アル・カッサム大隊」(ハマス)などの部隊と協力、共同し、占領軍や入植者への報復の作戦を展開することの必要性を示しているし、PFはそうした共同、共闘を展開し、強化するよう、よびかける。

こうした恐るべき流血の惨事は、その規模こそ小さいが、日々起こっている。それは、まさにガザ・アリエールハ合意の結果とその方向が占領の抑圧・弾圧、その「安全」に奉仕する以外の

誇りと栄光を示していることを称える。われわれは、離散のわれらが民衆がいっそう連帯の行動を展開し、シオニストの虐殺者を後退させるために決起することを、よびかける。われわれはまた、「ファタハのタカ」が占領軍に対する武装闘争を再開すること、いわゆる「停戦」なるものを投げ捨てると決定したことを、高く評価する。

われわれは、われらが郷土全域で、闘うすべての勢力と当局者たちが、各地の現場共同委員会の活動を再活性化することを、よびかける。UNLは、われらが人民に約束してきたように、郷土の全域でのあらゆる形態の闘いを拡大する。そして、インティファダの大衆に対して、以下の活動を展開することをよびかける。

一 占領軍と入植者の部隊に対する投石、火炎ビンなどの日常的な対決を拡大し、入植地への道路を切断し、占領に対する可能なあらゆる手段での闘いを展開することが敵にとって、最も深刻な損失であり、奴らをしてわれらが郷土から離れることを強制するものである。

一 攻撃部隊や特別部隊を再組織し、占領軍や入植者の部隊への待ち伏せ攻撃を準備せよ。

一 (ヘブロン虐殺の四〇日にあたる) 四月六日まで、家々の屋上に黒旗を掲げ続けよ。

一 フトル休日(ラマダン明けの休日)の祝賀的な行事のいっさいを停止し、祝賀は宗教的な行為と殉教者の家族や墓への訪問、弔問に限定されん。

一 三月四日金曜を、栄光のインティファダ

なものでもないことを明確にした。同時に、この醜悪な大虐殺は、かの投降の合意の棺に大きな釘を打ち込むことになった。

この大虐殺とシオニストの抑圧の継続は、われらが被占領下の郷土における、われらが人民のインティファダを、あらゆる種類の闘いを拡大することに奉仕するのみである。テロリスト、トラービンの政府の目的とその行為との対決、戦術的な行動に、大衆的な参加を作り出していることに、それは証明されている。大虐殺の報道がなされた直後から、被占領下パレスチナの至るところで、四八年被占領地域を含むあらゆる町や村で、われらが人民の大衆的なデモ、抗議行動が展開されていることにも、それは明確に示される。 PFLLP報道部

イブラヒミ・モスクと

シオニストの侵略策動(抄)

アル・ハダフ誌、第一一八〇号

イブラヒミ・モスクに対する侵略は占領開始直後から展開されている。

被占領下のあらゆるところへのシオニストの侵略がなされているが、イブラヒミ・モスクに対して、ユダヤ教と共有云々の宣伝がなされていることに示される。シオニストのウソの一端を暴露するためにも、同モスクへのシオニストの犯罪の歴史の一部を示す。

一六七年一月、モスレムの宗教行為に對して、同モスクの床にマットを敷くことを禁止

開始七六ヵ月目として、ゼネストを宣言する。一 主権の闘い、土地の日の記念日に向けた準備を。それらの活動に関しては、特別声明で明らかにする。

一 三月八日、国際婦人の日に際して、UNLは郷土内のそして在外のパレスチナ婦人に祝賀を伝える。われわれは、祝賀的な行事はやめ、それを闘いを拡大し、デモを組織し、占領に對抗するものにするようよびかける。

一 エルサレムへの入域を禁止する占領当局の「規則」を打ち破れ。そのためにも、とりわけ金曜には礼拝を利用してエルサレムへ向かうこと、もって占領当局の「規則」を意味のないものにせん。

一 四月六日まで、日曜には教会の鐘を鳴らし、金曜には抗議のデモを組織する期間とせん。

* われらが人民の輝かしいインティファダ万歳！

* イブラヒミ・モスクの殉教者とすべての殉教者よ、不滅なれ！

* インティファダを拡大することで、われわれは入植者の部隊と対決し、占領を打ち負かす！

* あらゆる意味で、われわれは勝利へと向かっている！

民族統一指導部 九四年三月二日

(編注、よびかけの番号が、また二〇一号となっていますが、掲載したアル・ハダフ誌のミスなのか、原文がそうになっているのかは不明なので、そのまま

一六八年一月、ユダヤ教の椅子などを搬入
一六八年九月、入植者が同モスクに侵入し、ユダヤ教の宗教行為を展開

一 同、占領当局は、同モスク内で、ユダヤが礼拝することを承認

一 七一年、占領当局地区長官が、同モスクはユダヤのシナゴグであるとみなす、と発表

一 七二年二月、同モスクの東門を、モスレムに禁止

一 七三年一月、占領当局はユダヤ教の椅子をさらに搬入

一 七五年初頭、占領当局は同モスクの重要な部分をシナゴグに改造し、モスクを分断

一 七五年七月、入植者が乱入し、モスクの尖塔への鍵を盗み、水道管を破壊

一 七五年一月、武装入植者が乱入し、僧侶が礼拝の前でコランを朗詠することを阻止。軍の将校はそれを黙認

一 七六年一月、武装入植者がモスクに乱入し、さまざまな破壊を展開

一 七六年一月、占領軍が、同モスクの一部を兵舎として使用

一 七六年一月、過激派のラビ、カハネが、パレスチナ人をヘブロンから追放するためにも、同モスクをユダヤの城にする、と宣言

一 七七年五月、入植者とラビ、レビンガーが同モスクに乱入し、内部で乱舞

一 七七年七月、入植者が、昼間の礼拝中に礼拝者に銃をつきつけ

一 七八年二月、入植者が乱入し、破壊活動。

兵士はそれを黙認
 一七八年四月、入植者が、新たな旧約聖書を
 持ち込み、その祝賀(軍がそれを支援)
 一七八年七月、占領軍兵士が尖塔へのドアを
 焼き、モスクの一員を負傷させた
 一七八年十二月、占領軍が、同モスク内部で
 乱射

一八四年九月、占領軍が、同モスクの内部に
 検問所を設置

和平交渉における対応の再検討を

— K・ハッサン (抄) —

アル・ハヤト紙、九四年三月八日

ファタハ中央委のメンバーで、パレスチナ国民会議の外交問題委員長でもあるハリッド・ハッサンは、先月のヘブロンでのイブラヒミ・モスクでの大虐殺の後、PLOはイスラエルとの和平交渉における対応、立場を再検討すべきである、と語った。

パレスチナ人民の間では絶望的な状況が覆っている。なぜなら、イスラエルの将軍たちが、勝者も敗者も存在しないところの、正当な和平を達成することを不可能にし、パレスチナの苦悩、内戦を導こうとしているからである。

歴史的にも多くの虐殺がイスラエルの指導者たちの手で遂行されてきた。四八年のデル・ヤシム、五六年のクファール・カッセム、八二年のサブラ・シャティールなど。そうしたことは、シオニストが、殺害行為への苛酷的な喜びをも

有しているとすら言えるのではなからうか。これは、イブラヒミ・モスクの礼拝者多数を殺した犯人の葬式に多くの参列者があり、その連中がこの犯人を英雄として称えるというあり方にも、証明されるであろう。

実際、ゴルダ・メイヤーやメナハム・ベギンといった元首相はパレスチナ人の虐殺をよびかける声明を発したりした。

ベギンは、彼の著書の中で、「革命」であり、それなくしてはイスラエル国家は創設されなかったと記している。周知のように、それには、ベギンが関わっていた。

ゴルダ・メイヤーはかつて、米のジャーナリストに、「私は、ベッドに入る前に、明日もまた多数のパレスチナの赤ん坊が産まれることを考えると、毎夜のようにパニックに陥りそうになる」と語った。

首相のラビンもまた、四八年には、ラムレヤリッドでの虐殺を展開した。

イスラエルの法律は、パレスチナ人の権利をなんら守ることはしない。これは、パレスチナ人を射殺したり、拷問したりしたイスラエル兵士に対してなされる法律、判決と、パの蜂起に参加した者へのそれとを比べてみただけでも、明確である。パレスチナ人は、投石でも数カ月、殺人なら終身刑だ。が、パレスチナ人を殺したイスラエル人は、微罪、六カ月の社会奉仕という判例もある。

イスラエルの歴代の指導者の誰一人として、

めのイスラエルの買収工作のいっさいを拒絶すること。
 一 米国が、被占領地からの全面的なイスラエルの撤退と、そこからのすべてのユダヤ人植地の全面撤去に明確に合意するまで、クリントンよびかけに決して応じないこと。
 残念ながら、クリントンのよびかけに対して、早くも腰を動かした者がいる。だが、PLO指導部に警告したいが、われらが人民は、彼らに流された血に価値を置かないような者に対して、決して容赦はしない、ということに肝を命じておくべきであろう。

ほとんどのイスラエル人は和平を望んでいる — シャー・ス (抄)

アル・ハヤト紙、九四年二月二日

アラファト議長は政治顧問であり、イスラエルとの交渉の代表を務めているN・シャー・スは、ほとんどのイスラエル人は和平を望んでいる、と語った。

(交渉過程へのイスラエル軍の介入が交渉に障害物を設けているのではないかと) という問いに対して、問題の一部は交渉者の間でも議論されている。軍が不断に妨害する必要性はない。が、イスラエル軍は交渉を彼らの手のなかに取り込みたいのです。シビリアンが交渉責任を負ったならばそれを妨害してくる。外相のペレスが交渉の責任者であった際に、首相のラビンはそれに障害を設ける行為をしてきた。しか

し、究極的にすべてのイスラエルの党派は、右派の諸党派やリクードの指導者の一部が表現していることにも示されるように、解決を望んでいる。和平は、パレスチナ人よりもっとイスラエルの利益になる。それはわれわれにいっそうの圧力となってはいますが。

(アラブ連盟が三月二七日に予定されている連盟の会議で同ボイコットの緩和をするであろうという報道に対して)、われわれは事前にイスラエル側に支払いをする必要などない。パレスチナ側は、一部のアラブの中にイスラエルとの共同事業を論議しようという拙速な動きがあることに對して自制を求めてきた。

また、南アの指導者マンデラは、パレスチナ民族当局が設立される前にイスラエルを訪問しないようにという、アラファト議長長の要請に同意した。

(カイロでの数週間に渡る交渉に関して)、交渉はガザとジェリコ地区の安全保障に関することが中心だった。今回のそれは最終合意の文面を作ること、それと国連軍の存在に関する問題など。来週には完了し、最後の段階でアラファトとラビンが残された六つの解決をし、最終合意に調印ということになるだろう。

(獄中者の釈放に関して)、国際赤十字から受け取ったリストでは最新の獄中者の数は九四〇〇となっている。

調印の日付を設定することは困難である。なぜなら、いくつかの問題には合意そのものに関係していないことも含まれているからである。

真の意味の和平や平和を理解しているとは言えない。彼らの言うのは、苛酷的な抑圧、弾圧をもつての「平和」ではない。そしてこれは、オスロ合意の文節の中にも、タバ、パリ、カイロでの交渉姿勢の中にも、現わされている。

(クリントンの、交渉のワシントンへの場所移動のよびかけに関して)、こうした対応は、西側文明の神経質でかつ厚かましい側面を示す。双方に自制をよびかけ、交渉をワシントンに移せば問題が解決するかのように見える人物の精神的側面を示している。だが、問題の根本はそんなものではないことは、だれもが知っている。

パレスチナ側は和平交渉における対応を再検討し、以下の段階に集中すべきであろう。

一 まず、暫定期云々というものをキャンセルし、六七年にイスラエルが占領した領土の全体からの全面的な撤退問題を直接に問うこと。もちろん、それにはエルサレムも含まれる。

一 六七年被占領地に建設されたユダヤの入植地のすべてを撤去すること。

一 被占領地の安全保障に関する交渉を停止し、イスラエルの占領によって引き起こされた損害の賠償を要求すること。

一 四八年のパレスチナ難民の問題を、国連決議一九四を基礎に設定すること。

一 将来の民主的な手段による、パレスチナ人の土地を含めた、統一、統合への扉を開いておくこと。

一 シオニストの裏切りの行為を覆い隠すた

その一例として、イスラエル側は、シリアーイスラエル交渉とパレスチナーイスラエル交渉が対立するような企てをしている。

(ラビンが獄中者の釈放とイスラエルのエー・ジェントや「裏切り者」の恩赦と絡ませてきていることに對して)、PLOは「裏切り者」が加わることを許すハマスよりも、そうしたことは堪え難い。が、パレスチナ人を殺害したと自己批判を表明するすべての「協力者」はPLOに加わる機会を与えねばならない。PLOは自らの過ちを認める者に対する恩赦には反対ではない。

(パレスチナ人の郷土への帰還に関して)、ガザ、アリー・ハに行くことと決定した離散のパレスチナ人は、誰であっても、民族当局から査証が発給される対象となりうるし、その期間は一年以内ということになる。永久滞在を望むパレスチナ人のすべては家族との再結合という計画の下で、投資家、兵士、官吏、民族当局のメンバー、ならびに六七年以降に離散した者のすべてに、そうしたことができるようになる。

難民問題は、四八年以来の離散を強いられているパレスチナ人の問題を取り扱う、と彼は付け加えた。

UNRWAとパレスチナ再難民

アラブ・ニュース紙、九四年二月二日

F・ハマデと彼女の二〇人の子供たちの一家

は、七三年以来、自分たちの家(とよぶことのできる場所)を求めている、数千の家族の一つである。

ハマデ一家は、イスラエルが四八年に創出されて以降パレスチナを逃げ、南レバノンのナバティヤ市にあったキャンプに七三年まで住んでいた。が、そこもイスラエルの攻撃で逃げ出さなければならなくなった。彼らは南部の中心都市サイダの古い軍の兵舎に住み着いた。が、そこもレバノン当局の約五〇万ともいわれるレバノン人、パレスチナ人の内戦難民に不法居住者の排除計画の一部として、一月月に退去させられた。

パレスチナ不法居住者には、レバノン人のそれと同様に、最大限で五〇〇〇ドルの弁償金が支払われた。が、レバノン人の場合はその家族にであるが、パレスチナ人の場合は国連の難民救済機関(UNRWA)に、新たな建物の建設に、支払われた。

六月には、ハマデ一家はアイネ・ヘルワのキャンプにある四九平米のアパートの鍵を受け取る予定になっている。アイネ・ヘルワはレバノンに現存する一二の難民キャンプの中で最大で、その人口は七万五千とも言われている。こうした建設計画はその手のものとしては初めてのもので、計一〇九戸の家屋が建設中である。

アイネ・ヘルワの人民委員会の公共関連担当者のアブ・バツサムは、「われわれはこの建設を巡ってUNRWAと大きな矛盾を抱えている。

彼らは、一二〇家族に対して、六〇の一部屋ユニット、一〇家族に一つのバスルーム、各部屋にキッチン用の小さな流し一つを計画していた」と語った。

各家族にすべてが揃った一部屋、そのサイズは二五平米から四九平米とするものに、修正を求める同人民委員会とUNRWAとの熱い交渉が展開された。その末に、「彼らは不承認合意したのですが、彼らの側の技師の一人は私に、こういう仕方では一一のアパートを損するときさと言いました。そこで私は彼に、われわれはパレスチナを失ったのだぞと言いました」とアブ・バツサムは語った。

ハマデ一家は、現在、サイダ市内のかつてはUNRWAが運営していた元学校の暖房もない部屋で食べる、寝る、シャワーを浴びるなどの生活をしている。昨年、UNRWAは約六千の再難民化したパレスチナ家族のために、在レバノンの難民キャンプ全体で、数戸の建設と修復作業を行った。

一九八二年のイスラエルのレバノンへの侵略の後、ベイルートで不法居住をしていた家族の内八五家族が新たに建設された二つの建物と一四の修復施設に移った、とUNRWA当局者は語った。

同様の計画が南部の港町スールの近郊にあるブルジ・シャマリエ・キャンプでも遂行された。しかし、ナバティエのキャンプやベイルート近郊のキリスト教徒地区から再度の難民と化したリ、アイネ・ヘルワの近くのミーエ・ミーエの

キャンプから難を逃れたパレスチナ人のほとんどには、問題はそのまま残っている。数百人とも数千人もという彼らは、アイネ・ヘルワの南側の入り口付近に住み着いている。が、そのほとんどは破れたトタンのボロ家に住み、衛生状況は劣悪である。

「もしUNRWAが真剣なら問題は解決し得る。これまでのところ、われわれはこうした再難民化した人々の問題の二〇%しか解決し得ていないのが実情です。われわれが実際に必要なのはこのキャンプを拡大することですが……」と人民委員会の書記長S・ジャマーは語った。また、UNRWAはそうした新しい建物を建設するのに大体二五〇〇ドルしかかけていないはず、つまり、不法居住者への弁償として支払われた半額程度だと、彼は指摘する。

ジャマーや他のパレスチナ当局者の多数は、レバノンではパレスチナ人に対して、難民問題そのものや、こうした再難民の問題を、イスラエルとの和平交渉で中東の新しい地図が固まるまで、無視しようという政治的な傾向がある、と不満をあらわにして語った。

重要日誌

一九九四年二月二日～三月二〇日

- 二月二日
 - ガザ、PFメンバール射たれ逮捕。
 - S・ゴリシュなどアラファートの側近、カイロ

合意を屈伏と批判。

・南アの週刊紙、南ア、イスラエルの核開発共同を暴露。

二月二日
 ・アラファト、月末には全面合意を希望すると強調。

・PFなど四組織共同声明、カイロ合意を非難。唯一の道はインティファダの拡大。

・労働書記長、ゴランのシリアの主権、パ国家を云々(本文参照)。

二月二三日

・ラマラ、「特務」の車を待ち伏せ、「特務」一人死亡二人負傷(本文参照)。ハマス、パ人民へのラマダンの贈り物(本文参照)。

・ガザ、手投げ弾攻撃。

・ゴラン、親シリア・デモ。

・ナスララー、武装闘争こそ唯一の方途、占領軍に対するゲリラの継続を。パ人民は革命を拡大し、シオニズムと裏切り指導部の抹消を。ティシュリイン紙、ラビンはPLOとの合意を他のアラブ諸国とのモデルにしようとしているが、シリアはそんな取引は受け入れない。

二月一四日

・イスラエル内でユダヤへの攻撃、負傷。

・ゴラン、ゼネスト。武装デモも。

・南部、レジスタンスの攻撃三つ、SLA一人負傷。

二月一五日
 ・ガザ、軍基地への攻撃、一兵士負傷、攻撃者も射殺された。他方、人民の闘い、一人死。

・南部、レジスタンスの攻撃。イスラエルの空爆(三波)、一人死亡二人負傷。また同海軍はスール沖で三漁船を拿捕。

・ラビン、交渉は、細部での合意まで必要な時間をかける。

二月一六日
 ・被占領地、PFメンバール、一人射殺され、三人逮捕。

・南部、レジスタンスの攻撃二つ。SLA一人負傷。ガリリーにロケット攻撃(本文参照)。

二月一七日
 ・人民の闘い、一人死亡四人負傷。

・ハマスのピラ、投降の路線反対。軍事的攻撃を拡大。裏切り者は接触者の殺害か、その支援を、よびかけ。

・南部、激戦。他方、国連軍監視兵二人地雷で負傷。

二月一八日
 ・南部、また九・一三旅団によるロケット攻撃。砲撃戦。

・米大使、南部の平和な情勢の維持に努力云々(本文参照)。

二月一九日

・西岸、入植者への攻撃、死亡。

二月二〇日
 ・ガザ、軍基地への攻撃。その後、軍が乱射、一人負傷し、人民の大衆的な闘い。

・西岸、人民の闘い、一人負傷。他方、入植者が道路封鎖など。

・シリアレバノン首脳会談(本文参照)。

・イエメンの和解合意(本文参照)。

二月二日
 ・シリア内相、イスラエルが繰り返して、秘密交渉、交渉の格上げを要求し、かつレバノンとの間に楔を打ち込もうとしている、と非難。

・南部、Z海軍が七人の漁民を拿捕。

二月二日
 ・被占領地、占領軍への攻撃、兵一人死亡、一人負傷。

・南部、レジスタンスの攻撃、SLA負傷。

二月二三日

・人民の闘い、ガザでは、手投げ弾攻撃、兵士負傷。他方ネゲブでも、警官への攻撃。

・ハッサン皇太子、国王、政府、国民はサウジの決定を称える(本文参照)。

・レバノン閣議、新しい治安法を採択(本文参照)。

二月二四日
 ・ハマスの声明、DFの軍事指導者をイスラエルのエージェントとして処刑。

・エルサレム地区、軍が多数のロケットで家屋破壊。一人死亡、負傷の三人逮捕。

・PLO、先週の妊婦殺害を非難(本文参照)。

二月二五日
 ・ヘブロン、イブラヒミ・モスクで大虐殺。

・同モスクのイマム「5・30に人民がお祈りに到着しはじめた。多くの兵士が展開し、パレスチナ人の身分をチェックした。最初の祈りの時に、突然、乱射が始まった。これは計画的な作戦である。周辺には多くの兵士が

展開していた」

各地で人民の闘い、一二人死亡二〇〇人以上負傷。ハマス、P.F・D.Fなど、報復をよびかけ。

各地のキャンプ、首都などでも抗議デモ(本文参照)。

二月二六日

・四八年ライン内アラブ地域を含めた全域でゼネスト、人民の闘い。計一九人死亡二五〇人以上負傷。

・アラファト、クリントンのよびかけに反対しない(本文参照)。

・フセイニ、ガザ・ジェリコ合意は決議二四二に沿った完全撤退の明確な予定表の中に。入植地問題は今から討議すべき。

二月二七日

・各地で人民の闘い、計五人死亡多数の負傷。

・ズークの教会で爆弾、一〇人死亡約六〇人負傷。ハラウイ、犯罪で犯罪を隠すことはできない(本文参照)。

・南部、レジスタンスの攻撃、S.L.A一人死亡。

二月二八日

・外出禁止令下、各地で人民の闘い、二人死亡二二人以上が負傷。

・ラボ、指導部は、

(1) パ人の安全のために国際部隊の駐留、

(2) すべての入植者の武装解除、

(3) 入植者をパの市や人口密集地域から締め出す、

(4) 西岸、ガザの一定の入植地の撤去、

を要求する。

三月一日

・人民の戦い継続。多数の死傷者。他方、ヘブロンで、軍が入植者を誤って射殺。

・南部、レジスタンスの攻撃(二つ)、G.Cの二人、ハズバラの二人死亡。他方イスラエル海軍、レバノン漁船七隻に発砲。

三月二日

・人民の闘い、計二人死亡一〇〇人近く負傷(ジェリコのデモでエレカットも負傷)。四八年ライン内パレスチナ人もスト。

三月三日

・エルサレムへの人民の行進、阻止された。他方、入植者の乱暴。

・シャラーカドウミ会談。

・レバノン、ヘブロン虐殺への抗議スト。キリスト教徒地区や南部の「安全地帯」でも。

・南部、レジスタンスの攻撃、イスラエル兵一人死亡。

・イスラエル人権運動ベツェム、ヘブロン虐殺とその後の軍による殺害を非難。

・カイロ、虐殺抗議のデモ。タハリール広場は戦闘の場。

三月四日

・各地で厳戒体制のもと、人民の闘い。軍や入植者への攻撃も。計四人が死亡。他方、入植者の暴力行為。

三月五日

・各地で人民の闘い、二〇人以上負傷。
・エルサレム、ピース・ナウよびかけのデモ。

二万五千のユダヤとアラブが参加。八二年のサブラ・シャティール虐殺で撤退をよびかけ以降、最大の結集。

三月七日

・人民の闘い、各地で計二人死亡三〇人負傷(米国の報道員一人も)。

・ハマス、入植地五つを特定して、報復をよびかけ。

・アラファト、ラビンの特使と秘密会談。

・ダラウシャ、「われわれはイスラエル内のパ・アラブを代表している」(本文参照)。

・南部、レジスタンスの連続的な攻撃、S.L.A一〇人死亡一七人負傷(ハズバラとG.C、G.Cは一人捕虜にした)。

三月八日

・人民の闘い、二人死亡。他方、占領軍はハマス狩り。

・ゴランでも人民のデモ。

・フセイニ王、サウジ訪問(本文参照)。

三月九日

・南部、イスラエルの空爆。

・パ人四〇〇人、現行交渉の停止、国連決議を基礎にした交渉に(本文参照)。

・アサド、弔問で来訪したダラオシャらに、正当で包括的な和平を強調。

三月一〇日

・外出禁止令の中で人民の闘い、三人負傷。他方、入植者の脱出、すでに二〇家族。